

仮面ライダープリスパーサ

taka@半魚人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

舞台は病院

医者でゲームライダー！？

主人公の善人がゲームクリアを目指し

新型ウイルスの「バグスター」に立ち向かう！

数々のドクターライダーも登場！

これは、風見市で繰り広げられる。  
医者たちの物語。

## 目 次

ステージ1 「I m a 仮面ライダー！」	1
ステージ2 「おじちゃんDOCTOR登場！」	8
ステージ3 「G A M Eの音色に乗せて・。」	20
ステージ4 「止まつっていた男のR U N！」	29
ステージ5 「全員集合！S T A G Eは3へ！」	38
ステージ6 「過去を乗り越えD R E S S U P！」	45
ステージ7 「心をG R O W、いざ進まん！」	53
ステージ8 「運命の時！光るC O O K I N G S E N S E！」	61
ステージ9 「D R A G O Nを討ち取れ！」	67

# ステージ1 「I m a 仮面ライダー！」

ここは“風見市”数々の医者達が集まる発展都市  
貴方が見届けるのは、さいきようドクターライダーの物語である

「やれつ！おら！」

ピッピッとゲームの操作音が聞こえてくる

「うおおりやあ！」

ゲームクリアの音声が診察室に響き

「よつしや！クリアだつ！」

その言葉を聞き、診察を受けていた子供が冷めた目で先生を見つめてくる。

え？何でこんな言い方するかって？

あつ！まだ自己紹介をしてなかつたな。

俺の名前は【安羅木 善人】（やすらぎ ゼンと）名前の由来は：まあ見たまんまだ。親が単に善を積み重ねながら良い人になつてほしいと願つたんだが…うん。逆だな。

こんな風に育つたのには親にも原因があると思う。※クズである。「安羅木先生！」俺を呼ぶ声が聞こえる。

「ちゃんどこの子を診てあげてください！」俺はゲーム機を両手に持ち直しこう言つた

「言つときますけど、俺は自分の診たい患者しか診ない主義なんですよ。」

言つてやつた。みたいなドヤ顔をした。俺と居た看護師はタメ息を吐いて診察室を後にした。

「あの先生、この子は…。」

「ああ、帰つてどうぞ。」

「もうこんな病院来るもんですか！」患者の母親は怒りながら帰つていった。

その途端！さつきの看護師が息を荒くさせて部屋に入つてきてこう言つた。

「安羅木くん！今貴方が担当している患者の山本君が逃げちゃつたのよ！」

は？今、なんて言つた？金蔓が逃げただとおお！

「俺、追いかけます！」金蔓をそう易々と手放すわけねえだろ！※クズである（二回目）

俺は病院を出ると横断歩道を渡つている翔介を見かけた。

「あつ、待つて！」こつちに気づいた翔介は走り出す。

そして、それを追いかける俺。

道は少しづつ狭くなり、車一台が通れる程度の狭さになつた。

「もう待つてば。」

ある曲がり角でピザ屋のバイクが止まつていた。

「ちよつと借りりますよ。」俺はバイクに乗ると翔介の方へ向く。

「ちよつと！それは故障中だよ！」

「え？」

そう言つた時には遅く。

バイクは走り出していた。

「うわあああ！」

道路の段差に引っかかつて吹つ飛ぶ。

「死ぬつてえー！」

たまたま通りかかつた女の人が駆け寄る。

「大丈夫ですか？」

と言つたとき、女人の頭に

さつき吹つ飛んだときに脱げた靴が降つてきてコツンッと当たつた。

女人人はフラフラしてその場に倒れた。

その時、手に持つっていた黒いトランクケースが開いて中から緑とピンクの蛍光色でベルトのようなものと手のひらサイズ程の“何か”が出てきた。

翔介がそれに近寄り

その何かには、フォルティの絵が描いてあつた。

「あつ！ フォルティアクション乙だ！ 今日発売の新作 „ゲーム“ ジャン。」

「ゲーム？ その言葉を聞いていち早く目覚めたのは…俺だ！」

「ゲームだとっ!? しかもフォルティ！」

「俺はベルトのようなものと手のひらサイズの何かを持った。

「よし！ もらった！」「…えー!!」

翔介はビックリしたが、ションボリしてどこかへ行ってしまった。

そうすると、さつきまで倒れていた女の人の目が覚めた。

「あいたたた、て！ それはダメ！ 素人が扱える物じやないんだから！」

何言つてんだこの人。

「いや。これは俺がもう！ 俺に出来ないゲームは無い！」

と言つたその時、遠くから人の叫び声が聞こえた。

「何だ？」「まさか！」

女の人は気付いたように

叫び声の聞こえた方に走つていつた。

俺もすぐに追いかける。

（風見市公園）

「やつぱり…。」

すぐに追いつき、息を切らしながらも前を向くとそこにいたのは。巨大な丸が合体した怪物だった。

『ピエエーーッ！』

うるさい叫びをあげた怪物は暴れだした。

「さつきの子だわ。」

「どういうこと？」

不思議に思う俺に彼女は

「あれは „バグスター“ が人間の身体を乗つ取つた姿よ。」

「バグスター？」

「新型ウイルスよ。バグスターは人間に感染して最終的には、あのよう完全に乗つ取るの。」

最初は何を言つてゐるのか意味不明だつたが  
目に見える物が確かだつた。

そして彼女が口を開く。

「まだ助かる余地はあるわ。」「え？」

「今、あなたが持っているトランクケースの中にある、

“ゲームドライバー”と“ライダーガシャツ”を使って今すぐオペをしなきゃいけないの。」

「オペを？これで？」

大体は理解したが、まだ戸惑ってる自分がいる。  
だが、口に出てしまったのだ：

「おもしれえ…俺に出来ねえゲームはねえ！」

「ちよつと!?何しようとしてるの?」

俺はガシャツの黒いボタンを押す。

『フォルティアクションΖ!』

そして上に掲げてガシャツを斜めにする。

「変身！」

ガシャツをひっくり返して

ガシャツを持つ手を勢いよく振り下ろす。

『ガシャット!』

そして俺の周りにプレートが現れ直感的に手が前に出て  
プレイヤーがセレクトされる。

『レツッゲーム! メツチャゲーム! ムツチャゲーム! ワツチャネーム!  
!?: アイム ア カメンライダー!』

ん? 何? え!

「な、なんじやこりやあー!」

なんだよ! この四等身!

胸にはボタンやら何やらある。

だが、俺に出来ないゲームは無いんだ!

「ノーコン! ノーミス! ノーダメージ! Ζのプレイをなめんなよ!」

クリア条件は? まあ奴を殺ればいいだけか。

「いくぜ!」

見た目の割に身軽な動きができるのに少々ビックリしたが  
敵の攻撃を避けつつ俺は“アレ”を探す。

「ちよ、ちよつと貴方。何してるので？」

「エナジーアイテムを探してんのだよ！」

所々にある茶色いブロツクを破壊しながら進んでいる内に黄色いアイテムを見つけて取る。

「高速化だ！」

ものすごい速さで相手にダメージを与える。

ダメージが入るたびに、HIT！の文字がでる。  
しばらくするとアイテムの効果が切れる。

「ふう、武器が欲しいな。」

と言つたら、目の前に両側に刃がついた斧が現れた。

『ガシャコンバスター！』

そんな名前なのか。使わせてもらうぜ！

俺はガシャコンバスター・バトルアックスマードでバグスターを切りつけていく！

奴は次第に小さくなり元の翔介に戻った。

「大丈夫か？」

「まだゲームは終わってない！」

「何だつて？」

翔介から出ていくオレンジ色の小っちゃいのが一ヵ所に集まつていく。

段々それは人の形をしていき見たことのある姿になつた。

「ボスのおでましか！」

こいつはフォルティの一面のボスの【トランプティーメ爵】だ。

男爵との一騎打ち。ガシャコンバスターのAボタンを押してバスター モードにする。

『ジャ・キーン！』

「いくぜえ！」

男爵をどんどん斬りつけていく！

HIT！HIT！と確実にダメージを与えていく。  
相手がよろめいた！今だ！

つて時にあの女の人が叫んだ。

「レベルアップするのよ！ピンクのレバーを展開して！」

何!?そんな機能あんのかよ先に言えよ！

俺は言われた通りレバーを開く！

「大変身！」

『ガツチャーン！レベルアップ！』

『フォルティジヤンプ！フォルティキック！フォルティフォルティア  
クション！乙！』

ん？お！おお！今度は八頭身！

「うおお！www」

男爵も弱ってるな。今しかない！

俺はベルトに刺さってるガシャットを抜き  
ベルトの横にあるスロットに入れる前に  
ガシャットに息をフッと吹いてからスロットにはめる！

『ガシャット！』

スロットの銀色のボタンを押す。

『キメワザ！』

右足に気が溜まっていき  
もう一度ボタンを押す。

『フォルティ！クリティカル！ストライク！』

その場でジャンプして右足を上に大きく円を書き

男爵に一発、蹴りを入れる。

『会心の一発！』

男爵は爆発した。

ゲームクリアの文字が浮かび  
クリア音が鳴る。

『ゲームクリアだぜ！』

（風見市総合病院）

俺は彼女に連れられエレベーターに乗る。

「は？地下？どんだけ下がるの！」

どうやら着いたみたいだ。

「ここは？」

「電腦救命センター。これからここは、あなたの活動拠点になると思  
うわ。」

いわゆる、秘密基地みたいなもんか。

「おつ？ ゲームがある。」

ゲームのある方に近づくと彼女が立ちふさがる。

「コスチュームチェーンジ！」

「うわ！」

いきなり目の前が光に包まれた。

目が慣れてくると、さつきのゲームの画面に  
彼女？ がうつってる。

「は？ え？ ええー！」

そして画面越しの彼女が言う。

「中野 アリス」は私の仮の姿。」

「改めて、私の名前は【ポッピーピポパボ】。全部のゲームをクリアし  
て世界を救うスーパーードクターになつて！」

一番驚いたのは、彼女の仮の名前が中野アリスだということ。

see you next game . . .

次回！ 仮面ライダープリスパーサ！

「なんだ。あのジジイ。」

「若いもんには負けんわ！」

「タガヤスアグリカル！」

次回！ 「おじちゃんDOCTOR参戦！」  
で、ゲームスタート！

## ステージ2 「おじちゃんDOCTOR登場！」

前回のあらすじを簡潔にはなすとだな。

まず、【中野 アリス】とかいう女が俺という天才に „ゲーマードライバー“ と „ライダー・ガシャツト“ をくれて、

仮面ライダーになつてバグスターを殺つたつてとこだな。

「…くん？」

聞き覚えのある声がする。

「や…ぎくん。」

あ、もしかして呼ばれてる？

「安羅木くん！」

ハツと目が覚めると、そこには見覚えのない天井がある。

「安羅木くん。起きて、出勤の時間よ。」

声の主を探し、辺りを見渡す。

「早く起きないと。」

そこに居たのは、中野アリスだつた。

「え？ ここは？」

「えと、私の家だけど。」

なぜ？ 何で俺が女の家に？

「あの後、貴方が急に倒れたから心配したんだからね。」

そういえば昨日、電腦救命センターで話した後の記憶が無い。

「寝ちゃつてた。心配して損しちやつた。」

「で、今何時？」

「え？ 今は、8時半だけど。」

8時半か…8時半？ あ、仕事。

「やつべえじやん！」

ああ殺される。急がねえと。

「よし！ 準備OK！」

「じゃあ行くわよ。」

そして俺たちは病院へ向かつた。

（風見市総合病院）

「安羅木くん。こつちよ。」

「え？ 俺はこつちだけど。」

「貴方のことならCRが引き取ったわよ。」

「引き取つた？ ホントにわけわからん。」

俺たちはエレベーターに乗り、

電腦救命センターに向かう。

さつきCRって言つてたな。

「てか、何で俺の名前知つてるの？」

「そりやあ、調べたから。」

「うわ、まじか…。趣味悪！」

「それに貴方、結構有名よ。」

「え？」

「悪い意味でね。」

ええ、なんで？

なんで悪い方で有名なの？

良い方じやなくて？

「色々なゲームセンターで看板まで立つてるのよ。」

ホントにそうか？ 俺は至つて普通だけど。

そうこうしてる間に目的地に着いたようだ。

「とりあえず着いてきて、話があるの。」

「話？ 話つてなんだ？」

新作ゲームの話か？ まあ聞いてみるか。

「で、話つてのは？」

「うん。実は、風見市の西の方ある、」

西の方角というと墓地がたくさんあるな。

「えーと。そう、『多賀安診療所』という場所に…、

多賀安？ 当て字かよ。ダサ！」

ま、俺の名字も近い感じなんだけど。

「ちゃんと聞いてる？」

「はいはい。」

そういえばコイツ。人格はポツピート全然違うよな。  
ギャップを狙つてるのか？ww

「それでそこに、ゲーマーが居るつて噂があるの。」

ゲーマーか。そんな簡単に見つかるわけねえだろww。  
あ、こういうのフラグつて言うのかな？

「だから、そこに向かうの。わかつた？」

「りょーかい。」

そして俺たちは、その診療所に向かつた。  
着いた。第一声が、

「古っ！」

はい！ここまで道のりを飛ばしたね！  
アリスがちよつと後ずさりして、

「入るの？」

なぜそんなことを訊く？

必要あるか？

「そりゃあ、まあね。」

「じゃあ私は待つてるから。」

は？何で？お前が連れてきたんだろう？

ハツと俺は気づく。

「もしかして、怖いのか？」

そういうとアリスは肩をビクツとさせて、

「そ、そんなわけないでしよう！」

明らかに動搖してる。

よし！ついに弱みを握つてやつた。

でも怖いのが苦手だなんて、可愛い一面もあるんだな。  
そして面白半分で言つてみる。

「一人で居るときの方が出やすいんだって。じゃあ行つてく…。」

と行こうとしたら、アリスに白衣の後ろの裾を掴まれた。

「ま、待つて…。」

おい。そんな泣きそうな目で見るなよ。

「わかつたよ。連いてこい。」

そして俺たちは診療所の中へ入つていった。  
自動ドアじゃないのかよ。

そんなことを思いながらも中へ入る。  
中は思つてたより綺麗だつた。

「いらっしゃいませ。こちらへどうぞ。」

受付の女性が言つてくる。

「今日はどのようなご用件で？」

「あの、ここにゲームの得意な人は居ますか？」

なんだこの質問はww。

でも受付の人はわかつたかのように、

「はい。農（みのり）さんですね。」

みのり？珍しい名前だな。

「その人に会わせてください。」

「なんだよ。もう元気かよ。」

「はい。案内しますね。」

そして受付の人に連れられて、

みのりという人物の所まで行つた。

「ここです。どうぞ中へ。」

と言われてドアの横にある名前を見た。

【大草 農】

（おおくさ みのり）

と書かれていた。

中へ入ると一人のご老人。

「何じや？ 何か用か？」

「貴方が農さんですか？」

「そうじやが、それがどうしたんじや。」

「まじか、老人だったのか。」

「貴方はゲームが得意と聞いたんですが。」

「得意つて程じやないが、農業ゲームと育成ゲームをやつとる。  
ほう、そういうジャンルの人か。」

てなるとアクションとかは苦手そうだな。

「戦闘系は好きではないんですね。」

「それでも良いんです。」

おいおい。もしかして、  
その人を戦わせる気か？

このじいさんがライダーになるのかよ。

「久しぶりの客かと思えば何かの宗教団体か？」  
いやいや、服見てわかれ。

どこから見ても医者だろ。

「勧誘という点ではかわりませんが。」

あ、ガチで戦わせるのかよ。

「貴方は、人類を救う唯一の逸材なの。」  
直球すぎるだろー！バカかコイツ！

「き、君は何をいつてるんだ？」

ホント何言つてんのこの人。

「しかも貴方の好きなゲームで！」

「ゲームか。良い響きじゃの。」

それなら鬭つてくれるかな？

と返答を待つていたら。

「何？もうこんな時間か。」

「どしたんだ？まだ午前の10時だぞ。

「いつも見とるニュースの時間じゃ。」

なんだ、そんなことか。

そしてニュースが始まつた。

「おはようございます。」

こんな毎日見てんのか。

「ただ今、新着のニュースが入りました。」

「これはとても信じがたいニュースです。」

「風見市の動物園で、」

脱走か？物騒だな。

「“怪物”が現れました。」

怪物だと!? もしかして!

「現場と中継がつながっています。」

そしてテレビの画面にはバグスターが映し出される。

「安羅木くん!」

「わかってる!」

急いで診察室を出ようとすると、

「どこへ行くんじや?」

「あの動物園です。」

「あれが私たちが闘うべき相手、バグスターです。」

俺たちは農さんを放つておき、

診療所を出て車へ向かう。

「よし行くぞ!」

そして俺たちは動物園へ向かった。

「行つてしまつた。」

わしはしばらく呆然としていた。

ふと机に目をやると、

そこには黒いトランクケース。

手を伸ばし開けてみると中には、

「ベルト? となんだこれは。」

ピンクと緑の蛍光色でベルトのようなものと緑の何か。

「皆さん見てください!」

ふと声の方へ向くと、

「男女二人が怪物の元へと向かっています!」

ヘリコプターから映し出された男女は、

さつきの人たちだつた。

「そうか、ホントに彼らはあの怪物と戦うのか。」

自分が見てるものが夢であればいいと思つた。

すると、あの子の言葉を思い出す。

「貴方は人類を救う唯一の逸材なの。」

「しかも貴方の好きなゲームで!」

ゲーム…。そうか、ゲームじやよ！  
わしにはゲームがあるんじやつた！

トランクケースを閉めて、それを持ち診療所を飛び出す。

痛くなる腰を我慢しながら。

自分の家に行き、真っ先に行つたのは馬小屋。

「マーちゃん。一緒に行こうか。」

わしはマーちゃんに跨り、

わき腹を蹴つてやると走り出す。

（風見市動物園）

「着いたわよ！」

急いで車から降りる。

「ピエーッ！」

うわ！キモ！タコ？クラゲ？  
小さい丸がいっぱい積まれて  
クラゲみたいになつてる。

「ぼさつとしてないで変身して！」

「うし！」

ゲームドライバーを腰に巻き、  
ガシャツトを顔の横で押す。

『フォルティアクションΖ！』

手を上に上げて、ガシャツトを反転させ斜めにする。

「変身！」

さらにガシャツトを振り下ろす！

『ガシャツト！』

そして目の前にプレートが現れて

手を前に出し俺のキャラをセレクトする。

『レツツゲーム！メッチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム！？：アイム ア カメンライダー！』

俺はいつもの四頭身になつた。

レベル1なのかな？

『ガシャコンバスター！』

よしきた！

俺はガシャコンバスター、バトルアツクスマードを持つて  
バグスターの方へ走る。

「うおおー！」

ガシッ！とあっさり持ち上げられて  
どんどん締め付けられる。

「ぐわあ！」

レベルアップしなきや！

そう思い俺はバグスターの触手を跳ね退ける。  
よし！レベルアップだ！

レバーを開こうと手を掛けると、

「ダメ！」

アリスが開こうとする手を掴む。

「何すんだよ！」

「まだレベルアップはだめなの！」

「レベルアップした方が効率いいだろ！」

思ったことを口にしたんだけども

「まずは患者の体からバグスターを分離しなくちゃいけないの。それ  
を行うのがレベル1なの。」

ちつ、まじかよ。

まあ武器もあるし余裕だろ。

と思つた矢先にバグスターに吹つ飛ばされる。

結構な怪力にやられたため体が思うように動かない。

よく見たら胸のゲージが減つてる。

体力ゲージだつたのか。

パカラツパカラツと馬の走る音が近づいてくる。

「ヒヒーン！」

馬が現れ、そこに乗っていたのは一人の老人。

「なんだ。あのジジイ！」

「あいたた。マーちゃんは速いのう。」  
て、農さん!? 何でこんなところに！

農さんは馬から降りると

黒いトランクケースの中から

ゲームドライバーと緑色のライダー・ガシャツを取り出した。

「解りやすい説明書じやつたわい。」

農さんは左手に持つてたゲームドライバーを腰に巻き、

右手に持つてたライダーガシャツを前に出してボタンを押す。

『タガヤスアグリカル！』

アグリカルというと農ゲーか？

「変身！」

ガシャツを反転させ右手を戻し、

左手に持ち替え、少し上に上げて下ろす。

『ガシャツ！』

俺の時と同じように周りにプレートが現れて

俺のキャラの隣をセレクトする。

『レツッゲーム！メッチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム！？…アイム ア カメンライダー！』

農さんはライダーに変身すると

緑色のライダーになつた。

「若いもんにや負けんわ！」

農さんは走り、バグスターに殴りかかるうとしたとき、  
グキッ！と大きな音がした。

農さんの腰にはデツカいHIT！の文字。

「あ、こ、腰が…。」

おいおい、患者救うのに自分が患者になつてどうすんだよ。  
まあいい、そろそろ体が回復してきたし。

「反撃といこうか！」

俺は立ち上がりガシャコンバスターのBボタンを三回押して  
バグスターに攻撃する。

すると押した回数分バグスターにダメージが入つて  
バグスターは爆発して元の患者に戻つた。

「富田さんじや！」

ん？誰？

「最近わしのとこへ来たんじゃが、ストレスだろうと帰してしまったんじゃ。」

そんな事があつたのか。

とりあえず分離したしほス戦だ。

小つちやいバグスターは一力所に集まつていき、人の形になつていく。

「あれはアグリカルのボス。盜賊の【マッシブ】じや。」

そんな名前なの？でも盗賊か手ごわそうだな。

「そんじゃレベルアップしますか。」

「そうこなくてはな。」

まず俺がレバーを開く。

『ガツチャーン！』

『レベルアップ！ フォルティジャンプ！ フォルティキック！ フォルティファルティアクション！』

続いて農さんがレバーを開きレベルアップする。

『ガツチャーン！』

『レベルアップ！ タガヤス！ ウエル！ ソダツ！ シュウカク！ タ・ガ・ヤ・ス！ アグリカル！』

俺たちはレベルアップすると

バグスターに立ち向かう！

「よし、バスターモードだ！」

『ジャ・キーン！』

ガシヤコンバスターをバスターモードになると、バグスターを斬つていく。

「なんだそんなもんか！」

そう言い、余裕の表情でバグスターも斬りかかつてくるが、なんとか避けつつ反撃する。

農さんは手に鍬のような物を持っている。やはりA Bボタンはついている。だが縋についていた。

農さんはコンクリートなんか物ともせず

鍬で地面を耕す：：というより掘り、なんかの種を植えた。  
どんどん育つていいき、ハエ捕り草みたいになつた。

「な、なんだ！ぐわっ！」

そしてバグスターを蔓で持ち上げて喰つた。

外でHIT！の文字が立て続けに出てる。

ペつと口から出されたバグスターは瀕死状態だつた。  
ハエ捕り草は朽ちていつた。

「決めましょう！」

「そうじやな！」

農さんは鍬のAボタンを押してシャベルにする。

『ザ・クーン！』

そしてシャベルで穴を掘りバグスターを落とす。

そこで俺はベルトからガシヤツトを抜き、フツと息を吹いてガシヤ  
コンバスターにはめこむ。

『ガシヤツト！キメワザ！』

ガシヤコンバスターに気が溜まつていいき、  
『フォルティ！クリティカルファイニッショ！』

俺はガシヤコンバスターを下から上に振りあげて、  
バグスターを上にふつ飛ばした。

『ガシュン！』

そして農さんはベルトのガシヤツトを抜き  
ベルト横のスロットにセットする。

『ガシヤツト！』

ボタンを押して左足に気が溜まつていく。

「老人のプレイング、見せてやるわ！」

そしてもう一度ボタンを押す。

『タガヤス！クリティカルストライク！』

農さんは、落ちてくるバグスターに左足を大きく上に振り上げ蹴り  
を入れる。

「ぐわあ！」

バグスターは爆発しパーフエクト！の文字が出て、ゲームクリア音声が鳴る。

農さんの周りに色々なゲームロゴが現れ、アグリカルの部分がゲームクリアになつた。  
↓ C R 電脳救命センター↓

「スゴイとこじやのう。」

「農さん。これからも頑張りましょう。」

「ああ、そうじやな。」

この人と一緒にやつていくのか

やはりゲームは協力プレイだよな。

「俺の名前は安羅木 善人。よろしくお願ひします。」

「ああ、わしは大草 農。よろしく頼む。」

と話しているとアリスが入ってきた。

「あ、農さん。来てたんですね。」

「おお、邪魔しとるよ。」

「そういえば、まだ名乗つてなかつたですね。」

「私は中野 アリスつてています。よろしくお願ひします。」

「よろしく頼むよ。」

「それじゃあ、これから三人で頑張りましょう。」

「やつと着いたわ。」

病院には一人の影。

「ここが風見市総合病院ね。C R はここにあるのね。」

s e e   y o u   n e x t   g a m e :

次回！仮面ライダープリスペーサ！

「私、琴音 櫻花といいます。」

「音ゲーの…ライダー!?」

「ホップステップ リズム！」

次回！「G A M E の音色に乗せて…」  
で、ゲームスタート！

## ステージ3 「G A M Eの音色に乗せて ■。」

前回までのあらすじ。

俺、安羅木 善人はC Rのドクターになつて未知の新型ウイルス「バグスター」を

ライダーガシャツを使つて、仮面ライダーになり戦うことになった。

そして前回は新たにC Rに加わつた大草 農さんと共にバグスターを倒したのだつた。

（風見市総合病院・C R）

「あ、アリス。珈琲くれ。」

「まつたく、それくらい自分でやつてよ。」

こいつは、中野 アリス。

俺にゲームドライバーとガシャツを渡してくれた人。  
タダでくれたからね。へつへつへ。

「そうじやぞ。人に頼つてばかりではイカン。」

この人は大草 農。

もう一人のライダー。タガヤスマグリカルのガシャツを使つて  
変身する。

「はいはい。」

俺は立ち上がりと、ゲームドライバーが目に入る。

そして、ふと思ひ付いたことを口にしてみる。

「そいいえば、変身したしたときに元の名前で呼ぶのも何だから、変身  
したときの名前を考えようぜ。」

「名前つて ■。」

「まあ、良いじゃないかの。」

とは言ひものの、暇だから言つただけで案は一つもない。

「もうフルティで良くね？」

「諦めるの早いのお。」

「決めるなら、ちゃんと決めてよね。」

「わったよ。」

うくも。名前、名前。ここで尺を使うのもなう。

そういえば。となり町のテレビだと  
たしか、エグ何とかいうやつが有るらしいな。  
とまあね。こんな話は置いといて。

「よし、後で考えよう。」

「アナタ最悪ね。」

「それが売りなんだけね。」

それはさてとき、バグスターの情報は今まで運良く入つてきただけど  
も

「バグスターの緊急情報はどうすればいいんだ？」

「お、待つてました！」

「なんだこいつ。馬鹿か？※唐突なクズである

「そんな貴方にオススメしますのは「ゲームスコープ」です。」

そう言うとアリスは聴診器みたいなを取り出した。

「これを使えばウイルスに感染した人が丸分かり！」

何やつてんだこの人。どこぞの通販番組だよww

俺はアリスから渡されると、首に掛けた。しつくり来るね。  
「患者の居場所の情報も入つてくるからね。」「そりやどうも。」  
すると、部屋に誰かが入つてきた。

「貴方たち、何をしているの。」

声のした方に向くと、そこにいたのは一人の女。

「さつきから音が鳴つてゐるのに気付いてないの？」

「えつ？」

さつきもらつたゲームスコープからビービーと音が鳴つていた。

「急患だよ！急いで。」

「分かつた、すぐ行く。」

そして俺たちは、病院を後にした。

（風見果樹園）

果樹園に着くと、カメラやマイクを持った人達が集まつていた。  
「橋本さん！大丈夫ですか！」

俺たちはその人混みに向かつた。

「医者ですか?!」

「はい、どうしました?」

さつきの女が応対する。

何だ、この女は来てたのか。

「橋本さんが急に倒れてしまつたんですよ。」

女は患者にゲームスコープを使つた。

「やはり患者だ。」

俺がそう言うと、女が立ち上がり皆に言う。

「これからオペ始めますので避難して下さい。」

「オ、オペだつて?」

もしかして此処でやるのか?まあ、やむを得ない。  
そして俺はガシャットを取り出してボタンを押す。

『フォルティアクション!』

俺の後ろにフォルティの画面が現れてチョコブロツクが出てくる。  
さらにゲームドライバーを腰に巻く。  
ガシャットを上に上げる。

「変身!」

ガシャットを反転させて降り下ろしゲームドライバーに挿す。  
『ガシャット!』

俺の周りにプレートが現れキャラをセレクトする。

『レツッゲーム! メツチャゲーム! ムツチャゲーム! ワツチャネーム  
・ アイムアカメンライダー!』

『ガシャコンバスター!』

ガシャコンバスターを取ろうとすると橋本さんが

マイク型のバグスターになり、屁ぎ払いで俺を吹っ飛ばした。

「ぐ、クソ!」

そういえば、あの女はオペをするつて言つてたけど。まさか…。  
「甘いわね。」

そう言う女の左手には黄色いガシャットを持っていた。  
「これだから自称ゲームーは。」

「何だと！」

女はガシャットのボタンを押す。

『ホップステッププリズム！』

ゲームエリアが女を中心として広がっていく。

ゲーム画面からは音符が飛び出してくる。

ゲームドライバーを腰に巻くと、ガシャットをマイクを持つように持ち。

「変身！」

ガシャットを反転させてベルトに挿した。

『ガシャット！』

そして女の周りにプレートが現れて左手でキャラをセレクトする。

『レツツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム  
・アイムアカメンライダー！』

！相変わらずの四頭身登場ww。

頭が音符みたいだな。

まあ感想はさておき、一人テンションが高い模様。

「あーー！ホップステッププリズムだ。ねえ善人、ホップステッププリズム  
だよ！」

テンションが高い理由は分かる。

初めてCRに行つた時、アリスがポッピーになつて入つたゲーム機  
体がホップステッププリズムだつたこと、俺が見逃すわけない。

その頃、二人に置いてきぼりにされた農さんはといふ。  
「みんな速いのぉ、やはり若いって良いなあ。」  
トボトボと歩く、農さんだつたのだ。

そして戻つて果樹園へ。

「クソー！こんなんじや埒が明かねえ。」

そういえば、みんなはアリスが避難させたのか。

そんなこと思つていると近くから声が。

「ああ、うちの果樹園が。」

げ、まだ居たのかよ。メンドいなう。

俺はキメワザスロットのボタンを押してステージセレクトをする。

『ステージ！セレクト！』

そして俺達は平原に移動した。

「これで暴れまくれるぜ！」

俺はガシャコンバスターを構える。

「うおー！」

真っ先にブロツクを叩き壊して、マツスル化のエナジーアイテムをゲットしてバグスターをガシャコンバスターでぶつ飛ばした。

「あ、やべ。」

少し飛ばしすぎたな。

俺達は急いで飛ばした場所に向かつた。

そこに居たのは、患者と分離したバグスターと

「俺の色違い？」

黒くなつた俺のキヤラの色違ひだつた。

レベル1だつたそいつは、レバーを開く。

『ガッチャーン！ レベルアップ！』

『フォルティジョンプ！ フォルティキック！ フォルティー！ アクショーンZ！』

レベル2になつた奴はすぐこちらに向き直り、ムチの様なもので攻撃してきた。

「痛つ！」

なんだ？ プラグ？ ネタかよwww、なんて言つてはいられないようだな。

奴は、お構いなしにプラグコードで連続攻撃して俺達を飛ばした。

「ぐわつ！」 「きやあ！」

急いで起き上がつた時には、奴もバグスターも消えていた。

「クソ！ 逃がしたか。」

そこで俺達は患者を連れて病院まで戻つた。

「風見市総合病院CR」

「橋本さん、必ず“私”が救います。」

たく、綺麗事かよ。※つくづくクズである。

それにこの女、私つてのを強調して言いやがった。  
ゲームをクリアすんのは俺だつてのに。

「みんな！バグスターの反応があつたよ！」

「何！」

「今度は僕も一緒に行くぞ！」

「農さん。居たんですか。」

我ながらヒドイ一言wwwあ、いつも言つてた。

そして俺達は車に乗つて、バグスターの反応があつた場所に向かつた。

「風見協会（廃墟）」

「ようやく来たな。」

「んだテメーは。」

俺のやつたゲームにこんな奴いたつけか?  
見たことのない敵キャラだ。

なんだこいつ。

俺が考えながら顔をしかめていると。

「まったく、ゲーマーなのに知らないの？」

ぐ、それを言われたらな。

「あいつは【ノイズン】よ。ホップステップリズムのキャラなの。」

「へー。（興味なし）

「そんなことより変身じや！」「おし。そうこなくつちや！」

そして俺達はそれぞれガシヤットを構えて起動させる。

『フォルティアクションΖ！』『ホップステップリズム！』『タガヤスマ  
グリカル！』

さらに、ガシヤットをそれぞれベルトに挿した。

『ガシヤット！』

『レツッゲーム！メッチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム

・・・ アイム ア カメンライダー！』

！レベル1になつた俺達だが、すぐレバーに手を伸ばす。

「大変身！」『其の式！』『2ソーン！』

『』『ガツチャーン！レベルアップ！』

『フォルティジヤンプ！フォルティキック！フォルティフルテイフオルティアクションZ！』

『タガヤス！ウエル！ソダツ！シユウカク！タ・ガ・ヤ・ス・アグリカル！』

『ホップ！ステップ！ジャンピング！ホップステップ・ブリ・ズ・ム！』

三人でレベル2になると、それぞれ武器を持つてノイズンに立ち向かう。

ノイズンは雑魚バグスターを出して邪魔をする。

「くそ、邪魔すんな！」

俺はガシャコンバスターで一掃する。

「次はテメーだ！」

そして俺達はノイズンに攻撃する。

「ぐわっ！」

ヤツは一瞬だけ怯むが、すぐに向き直り持つているギターを弾き攻撃してくる。

「うわーー！」『きやつ！』

だが、こちらも負けじと反撃する。

「ぐう・。」

全員の攻撃を喰らつたせいか、奴の体力が削られてるのが分かる。よし！決めるしかねえな！

「一気に決めるぞ！』『うし！』『分かつてます。』

農さんの掛け声を合図にガシャットをキメワザスロットにセットする。

『』『ガシャット！』

スロットのボタンを押す。

『』『キメワザ！』

三人の足に気が溜まつていく！

そして、もう一度ボタンを押す。

『フォルティ！』『タガヤス！』『ホップステップ！』

『クリティカルストライク！』

全員でジャンプして、ノイズンにキックを喰らわす。  
ノイズンは爆発して、ホップステップリズムのゲームがクリアされた。

『ゲームクリア！』

（風見市総合病院C.R.）

「今日も一件落着だな。」

「そうじやの。」

ノイズンの件で俺の色違いが現れた。  
奴がなんだつたのかは分からない。

でも今は考えても仕方ないな。

「でさ、アリス。前から言いたかったけど、ゲームマコーポレーションの  
社長って知ってる？」

「いきなりね。てか知ってるもなにも、ゲームマコーポレーション社長  
【任堂 天（じんどう てん）】はC.R.

に協力してるよ。」

「へー。・、えーっ！」

そうだったのか。知らんかった。

そんなこと思つてると扉が開く。

「みんな！差し入れだよ。」

「うおっ！院長！何故ここに!?

はえ？状況が掴めん。

「お、お父さん！」

お父さん！あ？さらにややこしいぞ？

「なんだ居たのが憐花。ほら、ケーキだぞ。」

院長は手にケーキ屋の箱を持っていた。

「ケ、ケーキ？買ってきたの。」

そういえば、この女が院長のことをお父さんって。

俺が顔をしかめると

「ん？ 憐花、自己紹介してないのか。」

「え？ ああ、まだ名乗つてなかつたわね。」

女は改まつてこちらを向く。

「私は【琴音 憐花（ことね れんか）】風見市総合病院院長、【琴音  
秋斗（ことね あきと）】の娘よ。」

「え――――！」

俺が驚愕してるなか、憐花とかいう女はニッコリと笑いながらケー  
キを口に運んでいた。

ホントにこれからやつてけるかな、俺。

夜のビル街。

冷たい風が吹くなか、一人の男と怪物がいた。

「カーボン、問題を出そうか。」「なんだ？」

「これから何が始まるのか。わかるか？」「どうせ、ゲームだろ？」

「正解とも言える。だがしかしーしー。」

男はそう言うとニヤリと笑みを浮かべた。

「これから始めるゲームは、人間とバグスターの生死を掛けたゲーム  
さ！」

s e e   y o u   n e x t   g a m e   .

次回！ かめん、飽きたから農さん頼みます。 え？

次回！ 仮面ライダー・プリスパー！

「何だ？ あの姿は！」

「もう、C Rには居られない。」

「爆走バイク！」

次回！ 「止まつていた男の、R U N！」で、ゲームスタートじゃ！

## ステージ4 「止まつていた男のRUN！」

前回のあらすじ。

俺、安羅木 善人はCRのドクターになりバグスターと戦つている。

まあ4話だし1話から見てるから知ってるだろ。  
んで前回は、俺の色違いが現れたんだ。本当に奴は一体?  
そして新たに加わった【琴音 憐花】と共にホップステップリズム  
の敵、ノイズンを倒したのだつた。

♪電脳救命センターCR♪

「プリスピーサ！」

「おお、急にどうしたんじゃ。」

この人は大草 み・。もういいよね、こういうの。

メンバー紹介を毎回やつたら尺が勿体ない。だから皆さん察して  
ください。※今回もクズである。  
「変身後の名前ですよ。」

「ほ、ほゝ。」

興味無さそう。なんでや。

「この前ポッピーが勝手に名前つけたんすよ。で、俺はみんなの分ま  
で考えたんですよ。」

「良い名前でしょ♪で、みんなの分まで考えたつて？」

アリスは少し驚いた顔で言う。

そんなに驚くことか?

「それで僕の名前は?」

「農さんは【仮面ライダーねイチャ】です!」

「んん。そのまんまな気がするが、いいか。」

ええ、不服そう。俺は好きだけどなあ。

視線を感じる・。

視線の方を向くと、憐花が期待する目をこちらに向けている。

「よし、憐花。お前は【仮面ライダーレカルカ】だ!」

「ポーランド語で女医師ね。まあ、善人にしては良いんじゃない。」

ふつ、素直じやないねえ。

気に入つたならそう言えばいいのに。

「そういうえば、順々にライダー集まつてのこれ以上に増えるのか？」

？」

「うーん。ガシャットにも限りがあるしね。これ以上は…。  
そうか、確かガシャットはゲームの社長が提供してんのか。  
んでクリアするゲームは十個。増えんのか？」

「そうか、サンキュー。」

最近はバグスターの動きも見れないし、平和だな。  
とか思つてたらゲームスコープの急患が鳴つてるー。  
メンドクセー、まあゲームできるんじや話は別だ。  
そして俺たちは急患があつた場所へ向かつた。

「風見公園」

何だココか。

「見て、あそこ！」

憐花の指さす方に女が倒れていた。

「確認して。」

「うん。」

憐花がゲームスコープで読みとると、  
やはり“ゲーム病”だつた。

「よつしや！いくぜ。」

「ああ、そうじやな。」

「オペを開始しましよう。」

「ん？近くに患者の彼氏らしき人物がいた。  
お、オペ？彼女に何をしようとしてるんですか？」

ちつ、メンドいな。

「アリス、そいつ連れてけ。」

アリスたちが行つたのを確認した後、

俺たちはガシャットのスイッチを押した。

『フォルティアクションZ!』

『タガヤスアグリカル!』

『ホップステップリズム!』

3つのゲームエリアが広がり、患者はバグスターになつた。

「ピエエ！」

そこに一人の男が現れた。

男は無言で赤いガシャットを取り出しボタンを押した。

『爆走バイク！』

ガシャットを装着してドライバーに挿した。

『ガシャット！』

男の周りにキャラセレのプレートが出現し、男は正面に来たキャラをセレクトする。

「誰だ？ アイツ。まだライダーが居たのか。」

「知らない。でも私たちも変身しなきや。」

「そうじやな。」

俺達もベルトにガシャットをセットした。

『ガシャット！ レツッゲーム！ メツチャゲーム！ ムツチャゲーム！ ワツチチャネーム・アイムア仮面ライダー！』

それぞれのキャラをセレクトし、レベル1に変身する。

相手はタイヤの様な形をしている。てことは爆走バイクか？

爆走バイクといえば、破壊妨害なんでもありのレースゲームだな。まあ、これぐらいなら俺もやるし。

さつきの男はレベル1になつて、両手にタイヤを持つている。

「ピエエエー!!」

バグスターは俺らに突進してきた。

難なく避けるも、相手は直ぐに向き直り突進してきた！

避け遅れた農さんが飛ばされた。

「ぐわあ!!」

俺はすぐに農さんのもとへ向かつた。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ。」

すると、爆走バイクの男が回転をしてバグスターに突っ込む。バグスターからはHIT！の文字が出て、攻撃される。

弱つたのか、バグスターは患者と分裂した。

分離したウイルスたちは合体して一体のバグスターになった。

「あいつは、【モータス】。」

今回のゲームが爆走バイクだということが確信できただぞ。さすが俺、読みが当たつたな。

「ダ、ダレカア！」

ん、あの男まだ回つてたのか。

よく見るとモータスは雑魚バグスターをバイクに変えて患者の彼氏を拐つていった。

「あ、クソ！」

モータスを追おとすると、モータスはスピードを上げ爆走バイクの男を轢いて行つてしまつた。

爆走バイクの男は轢かれて飛んでいた。

アニメかよww

そして俺たちは一旦、患者を連れて病院へ戻つた。

（風見市総合病院CR）

「直人は、直人は無事なですか？うつ・。」

ゲーム病が悪化している。やはりリストレスか。

前の患者の橋本さんが仕事のことでストレスを感じてると言つていたなだよな。

もしやとは思つたが、まさかな。

「・・・」

「どうした憐花。」

表情を曇らせる憐花に話しかけると、ハツとなり首を振る。

「な、なんでもない。」

んだよ、本調子じやねえなコイツ。

あ、そういえば昼飯がまだだつたな。

ゲームスコープもあるし食いにいくか。

（中華料理店・劉宝軒）

最近この店に通っている、こここの炒飯が旨いんだわ。

「イラッシャーイ！」

こここの店主は不馴れなように片言で喋つてる。

「いつもので。」

「アイヨー！」

こここの二階には坪押しで治療ができる店がある。

そんなんじや、医者の立場がないが。どうだつていいか。  
そんなことより、さつきの戦いで知らない男が来てたな。  
あいつは誰だつたんだ。

考えていた俺店主が炒飯を渡す。

「ハイ！」

「ありがとうございます。」

そういうえば、さつきの男も片言だつたような気がする。

皿を洗う店主を見る。まさかな。

まあ今は炒飯を食べよう。

スプーンを口に運ぶ。うん、美味しい。

炒飯を堪能していたとこにゲームスコープから音がなる。

「マジかよ。」

と、小声で呟いた。

そして席を立ち、金を払つて早々に店を出た。

とある工場の跡地に着くとアリスだけがいて、目線の先にはモータスと患者の彼氏がいた。

「他の二人は？」

「それが二人とも他に患者がいて来れなかつたのよ。」

「そうか、じゃあ今回の手柄は俺のもんだな。  
とそこに、あの男が来た。」

「またテメエか。一体誰なんだ。」

男は少し黙つた後に口を開いた。

「ワタシは【宝・劉醒】（ホウ・リュセイ）、元医者ダヨ。」

「元だと？そして名前は中国人っぽいな。」

「だが、アリスは俺とは違う驚き方をしていた。」

「宝、さん？なんで。」

「いかにも訳ありな感じだな。」

「知つてんのか？」

「ええ。だつて彼は、『元CRのドクター』だもの。」

「は？マジで！この男が元CRのだつて？」

「おい！何を『チャゴチャやつてんだ。さつさと勝負しろ！』

モータスがキレてる。

「しゃーねえな。今からぶつ潰すてやる！」

俺と宝とかいう男はガシャットをベルトに挿しレバーを開いた。

『ガシャット！ガツチャーン！レベルアップ！』

『フォルティジョンプ！フォルティック！フォルティフオルティアクションZ！』

『爆走！独走！激走！暴走！爆走バイク！』

何と男のレベル2はバイクの状態だった。

『乗り名なサイキヨーゲーマー。』

「お、おう。」

モータスは納得いかなそうに言つてきた。

「こんな場所だとなんだ、場所を変えようぜ。」

「ああいいぜ！」

俺はスロットのボタンを押してステージを決める。

『ステージセレクト！』

変わつた場所はレース場だ。

「ここなら良いだろ。」

「うつしやー！行くぜ！」

モータスは一人で行つてしまつが、俺たちもすぐに追う。

「オラオラ！」

行く手を阻むようにモータスが邪魔をしてくる。

「ぐ、くそ。」

「ハツハー！そんなもんか!?」

くっそ。下に見やがつてコイツ！

てゆうかヤバイな、ゴールが近い。

チクショウ、こうなりや一気に決めるしかねえ。

俺はバイクごとジャンプし、ブロックを破壊してエナジーアイテムをゲットする。

『高速化！』

よしへゲット！これならモータスとの距離を縮めらる！

一気に縮まつたところで、爆走バイクのガシャツトをバイクのキメワザスロットに挿し、ボタンを押す。

『キメワザ！』

さらに、もう一度！

『爆走クリティカルストライク！』

ウイーリーでモータスを追い抜き、バイクのマフラーから出る噴射でモータスを撃破する。

そしてガシヤコンバスターで患者の彼氏が捕まつての鎖を壊した。  
「あ、ありがとうございます。」

『ゲームクリア！』

彼の言葉とともに爆走バイクがクリアされる。  
よーし、一件落着だ。

帰り道、アリスは患者の彼氏と先に帰つていった後。  
俺たちは、変身解除せず話していた。

「なんでCRを抜けたんです？」

「ソレハ、今は言えなし。話すときが来れば話すヨ。」

「じゃあ、CRには戻つてこないんですか？」

「もうCRなはいられない。ただ、ソレダケサ。」

そんな重い空気の中、目の前に黒いプリスピーカーが現れた！

「お前は。」

奴の手には黒いガシヤツトがあつた。

『ガツチヨーン！』

ベルトのレバーを倒して、黒いガシヤツトのボタンを押す。

『バクドキホラー！』

奴の後ろに出た画面から、何か出てきた？!

そして、そのガシャットをベルトのもう一つのスロットに入れてレバーを開いた。

『ガシャット！ガッチャーン！レベルアップ！』

そして辺りが急に暗くなつた。

『フォルティーアクション！乙！アガツチャ！いつでも！どこでも！ホラー！君の後ろにバクドキホラー！』

奴とさつきの何かが合体するとき、奴の後ろから鬼のようなのが来て。バクツと噛み付き、黒いプリスピーサはレベル2とは違う形態になつた。

「何だ？あの姿は！」

そうすると、黒いガシャットを抜いてキメワザスロットに入れてボタンを押す。

『ガシャット！キメワザ！』

奴の腕にあるクローナーに気が溜まる。さらにもう一度ボタンを押す。

『バクドキ！クリティカルストライク！』

奴はこつちに思いつき走ってきて、クローナーで斬りつけてきた。

「うわあ！」「グア！」

体力ゲージが半分も削られた。

くつ・・・これじゃ分が悪い。一旦退くか。

『ガッチョーン！ガッショーン！』

変身解除し、急いでその場を離れた。

くそ、一体なんだってんだ。

そして、俺は病院へ帰つたのだつた。

「仮面ライダー。プリスピーサかあ。面白くなりそうだ。」

男はニヤニヤとしながらゲームをしていた。

「これからはレベル3の時代だ、面白いだろ？カーボン。」

「ぐだらん。」

カーボンという名の怪物は歩いて行ってしまった。  
「んだよ、白けるな。まあ、これからもつと楽しいことになるんだ  
よ。そうだろ・善人。」

see you next game

次回！仮面ライダープリスパーク！

「ガシャットが盗まれた!?」

「君が善人くんかな？ありがとう。」

「ワンツースロット！」

次回！「全員集合！STAGEは3へ！」  
でゲームスタート！

## ステージ5 「全員集合！STAGEは3へ！」

前回の続き。

CRのドクターであつた【宝 刘醒】が俺たちの前に現れた。  
そして、無事に爆走バイクのバッグスター【モータス】を倒したのだが。。。

例の黒いプリスピーカーがまたも出現した。  
ゲームドライバーの二つ目のスロットにガシヤットを挿し、新しい形態になつた。

あの姿は何だつたのかは、まだ分からぬ。（いつもより長くなつたな。）

（風見市総合病院・CR）

「黒いプリスピーカーがレベルアップしたじゃつて？」  
「そうなんですよ。」

あの黒いガシヤット、バクドキホラーとかいつてたな。  
確か10個のガシヤットの一つだつたな。

「うむ。」

「善人、見て。」

アリスが話しかけてきた。

「ん。なんだ？」

「ゲームの社長からテレビ通話が。」

「え？ 社長本人から通話なんて一体何事だ？」

『やあ。CRの諸君。私から折り入つて話がある。一度、コツチに来てくれないか？』

「は、はあ。」

（ゲームコーポレーション・社長室）

俺たちはゲームの社長、【任藤 天】の目の前にやつてきた。

そして社長は席を立つて、コツチに来たから俺が話をふつかけた。  
「やあ、社長さん。アンタの顔、よくテレビで見るよ。」

「君が善人君かな？ありがとう、君の顔もゲームセンターでよく見るよ。」

・そんなことを言い、社長は俺に笑顔で手を差し出す。

・おいおい。「もうそれはいいだろ。」

顔がひきつりながらも手をだし握手した。

そして社長は、みんなの方に向き直り挨拶をする。

「他の皆さんも、よく来てくれました。私がゲームコーポレーション

社長の任藤 天です。」

「すいません。本題に入りますが、用件をきかせてください。」

憐花がいきなり用件を聞き出そうとした。

「そうだね。じゃあ話させてもらうよ。」

「安直に言うと、ガシヤットが盗まれたんだ。」

「ガシヤットが盗まれた！？」

うえく、こんな会社でも盗まれることがあるんだな。

「盗まれたのは、この六つのガシヤットなんだ。」

そう言うと社長は、ガシヤットの画像を見せた。

その画像には十個のガシヤットが載っていた。

「そして盗まれたというのが、【ワンツースロット】【ペツツグロー】【ドレスアップクローズ】

【デリシヤスクッキング】【バクドキホラー】【ドラゴベナトール】  
この六つだ。」

バクドキホラーだと？ 確か黒いプリスピーカーがつかってたはずだが。

「話は聞かせてもらつたヨ。」

後ろからの声に全員が反応する。

「宝さん！」

おおおお、盗み聞きか、関心しねーな。

「いやあ、キミ達の手を煩わすわけにはいかないヨ。」

何だ？ 情けのつもりかよ。

「ありがとうございます。ですが同情ならいません。それにゲームに関しては譲れないんで。」

「善人君もそう言つてますし、宝さんも手を取り合つて頑張つてくれ  
さい。」

あんたの言えたことかよ社長さん。

それよりもこの二人に面識があんのか、つつてもそりやそろか。

「ということで、頼みましたよ。」

病院に帰る途中、「お？ 誰か座つてんぞ。」

俺たちの日線のさきには、橋のしたで座つてる男がいた。

「こんなとこに座つてるなんて不自然ね。」

「いいのか？ 俺たちが首つつこむことでもねえんじやないか。」

「でもさすがに注意は必要じやろ。」

おおおお、二人ともお節介だな。

「大丈夫ですか？」

アリスが男の傍に寄つて声を掛ける。

が、男は黙つたまま座つていた。

「善人、行きましょ。」

「んでだよ。」

「いいの。ほら早く。」

憐花が男の方へ行けと促す。

「おーい、大丈夫ですかあ？」

俺が話し掛けても返事がない。

「様子が変ね。善人、スコープを使つて。」

「ええ、俺？」

俺がスコープを使おうと、首から外そうとしたら、スコープが鳴りだした。

「よし来た！ ジャあな。あとは任せた。」

俺は直ぐに現場へ向かつた。

ずいぶんと開けた所に來たな。

ん？ 「あいつ！」

奥のほうに黒いプリスピーカーがいた。

「あいつ、何でこんなところに。」

そして、やつの前には頭にガシャットがささつて、え!? ささつて、  
る変なのがいた。

変なのは、胸の辺りにスロットが付いていた。

「んじゃ、そろそろだな。」

俺はガシャットを構えボタンを押す。

『フォルティアクションZ!』

そしてガシャットをベルトにセットしてレバーを開く。

『ガシャット! ガツチャーン! レベルアップ!』

『フォルティジョンプ! フォルティキック! フォルティフオルティア  
クションZ!』

「うおおおお!」

『ガシャコンバスター!』

ガシャコンバスターを手に取り、斬りかかった。

「ヴエ!」

バグスター(?)を斬りつけると黒いプリスピーカーが蹴りを入れて  
きた。

「くつそ! 邪魔すんなよ!」

よろけるが、すぐに体勢を立て直し奴に反撃を囁ます。

奴はサッと避け、例のガシャットを取り出し、ボタンを押した。

『バクドキホラー!』

ゲーム画面から、あんときの黒いアイツが出てきた。

コツチに突進してきた!しかし、俺に当たる寸前にネイチャー、農  
さんが攻撃を弾いた。

「み、農さん!」

「間に合つたようじゃな。」

どうやら、農さんも少し遅れて来ていたようだ。

でもなあ、来るならもつと早く来てほしかったなあ。※こんな状況  
下でもクズである。

「大丈夫か?」

「は。はい。他のみんなは?」

「あ、ああ、すぐに来るじゃろ。」

奴の方へ向くと、ガシャットをベルトに挿してレバーを開いた。

『ガシャット！ガッチャーン！レベルアップ！』

『アガツチヤ！いつでも！どこでも！ホラー！ホラー！君の後ろに！  
バクドキホラー！』

まだだ、あの姿になつた。

こうなりや俺にも策があるぞ。

「農さん、下がつていてください。」

「へ、平氣か？」

「はい、任せてください。」

ガシャコンバスターをアックスモードにして、ガシャットをセットする。

『ガシャット！キメワザ！』

「うおおー！」

勢いよく大ジャンプして、バグスター（？）に振りり下ろした。

『フォルティ！クリティカルファニッシュ！』

爆発と共に飛んだガシャットをキャッチして、着地してからガシャットのボタンを押した。

『ワンツースロット！』

ゲーム画面から奴のときみたいに何かが出てきた！そうだ、これをアイツみみたいに。

俺はベルトのレバーを閉じてガシャットをベルトの二つ目のスロットに挿した。

『ガッチャーン！ガシャット！』

さらに、掛け声と一緒にレバーを開く！

「大！大！大変身！」

『ガッチャーン!!ベルアップ！』

レバーを開くと、さつきのやつが俺に噛み付いた。

「ん？うわあああ！喰われたー！」

『一攫千金！揃えろセブン！ワン！ツー！スロット！』

噛み付いたと思ったら、俺と合体した。

頭にはレバー、胸にはスロット、左腕にはコインの投入口みたいなのが付いた。

「おお、力が湧くぜ。おい黒男！この姿なら互角に張れるな。」

「コイ。」

キエエアアー！シャベツタアアー！えつ？こいつ喋れんのか。まあ普通に考えてそうか。人だもんな。

「んじゃ。遠慮しねえぞ！」

勢いよく突進して左腕を振るう。

普通に避けられたが、左腕を奴に向けコインを飛ばした。

よし、ひるんだ！さらに追撃しまいと突進し、思いつきり殴った。

奴は吹っ飛んで、片膝を着いて受け身をとつた。

だが、ダメージを与えたため少し止まつっていた。

今しかねえ！

俺はワンツースロットをキメワザスロットにセットしてボタンを押した。

『ガシャット！キメワザ！』

奴はコチラの行動を読み取つてガードした。

そして、もう一度ボタンを押す！

『ワンツー！クリティカルストライク！』

頭に付いたレバーを倒すと、胸のスロットが回りはじめた。キタキタキター！スロットが順に止まつていく。

7！・・・7！・・・

7！「よつしや！揃つたつ！」

奴の方に左腕を構える。

「特大サービスだ、受け取れ！黒男！」

左腕の口から、大量のコインが飛び出した！

コインは奴目掛け飛んでいき、多段ヒットした！

段々コインが出なくなつたから、ジャンプして奴を思いつきりぶん殴つた。

『会心の一発！』

「どうだ！つて、居ねえ！どこいきやがつた?!クソ。」

まあいいか。ワンツースロットのガシャットは手に入つたし。  
でも、あのバグスター（？）はなんだつたんだ。

結局、黒男の正体も分からずじまいだかんなー。  
一体、誰なんだ？・・・

「ハア、ハア。」

ライダーゲージがギリギリだ。

私は建物の柱に凭れ掛かつた。

レバーを閉じて、ガシャットを抜いた。

『ガツチヨーン！ガシユン！』

「どうしたんだ　”天”　息が切れてるじゃないか。プリスパーサに  
やられたのか」

「あ、ああ。だがこれも想定ないだよ。」

「でも身体が震えているぞ？やつぱり、あの力を恐れているんじや。」

「何を言っているダガー。恐ろしいのは、他でもない私自身の才能  
さあ！」

私は任藤 天。全ては計画の内さ。

「さすがだな。仮面ライダー ”ゲーマ”！」

see you next game · · ·

次回！仮面ライダープリスパーサ！

「善人いで出来たのよ。私にも出来るわ！」

「お母、さん・。」

「ドレスアップスローズ！」

次回！「過去を乗り越え！DRESSUP！」で、ゲームスタート  
！

## ステージ6 「過去を乗り越えDRESS UP！」

前回のあらすじ。

えくと、ガシャットが盗まれて、えく。

もう！遅いよ善人！

それじゃあお願ひするわ。

てことで、今回はポツピーがやるよ！

ゲームコーポレーション社長から直々に六つのガシャットが盗まれたことを聞いた私たち。だからガシャットを探すことになつたの。

そして善人は、謎のバグスターに挿してあつたガシャットを取り返し、黒いプリスパーサを撃退することができたよ！

疲れたあ（ボ

ソ

SCR

「善人、この前はお疲れ様！」

「ああ。」

「この調子でヨロシクね！」

「ああ。」

「どうしたの？機嫌悪いけど。」

たく、ど直球だなコイツ。

普通は訊かねえだろ、んなこと。

「だつてよお。毎日雨なんざ降られたら腹もたつぜ！」

俺の怒りが爆発寸前だった。

「こんな日ばつかで毎日出勤だぜ？サイアクだろ！」

「なんで、雨楽しいじやん。」

何言つてんだコイツ。雨が楽しいだ？訳わかんねえ。

「お前は気楽で良いよなあ。つうか、お前家持つてんのに帰んねえの

？」

「というよりも、お前には出勤という文字が…。」

俺が愚痴を吐いていたらドアが開いて、院長と憐花が入ってきた。

「で、安羅木くん。雨の日の何がサイアクだつて？」

「あ、ああ。雨の日でも出勤なんて、苦労だなあと。」

「嘘つくならもう少しマシにしたら？」

うげ、バレてたのかよ。俺の迫真の演技が見破られた。  
憐花が俺を横目で見ながら溜め息をついた。

「おいおい、人に向かって溜め息はねえだろ。」

何だ憐花のやつ、元気ないな。

「みんな！急患だよ！」

ポツピーが俺らに知らしてくれた。

「んじゃ行くか！」

いざ着いてみると、ココは・・・。

前に俺がワンツースロットを使つた場所だ。

急患で呼ばれたはいいが、肝心の患者がおらん。

少し歩き回つてると、黒いプリスパーサが現れた！

「てめえ！」

ベルトを腰に巻き、ガシャツトを構えると。

「お前の相手はコイツだ。」

「!?

すると、この前の頭にガシャツトが挿してあつたヤツが出てきた。

そこに、憐花と農さんが合流した。

「なんじや、コイツは。」

「この前言つたやつですよ。」

「バグスターなの？」

「それは分からん。」

ヤツの頭にはクリーム色のガシャツトが挿してあつた。  
見たことないゲームだな。

「憐花、あのゲーム知ってるか？」

「あれは【ドレスアップクローズ】女の子に人気の着せ替えゲームよ。」

俺が反応しようとしたら、

「それと、自分の知らないのを聞く癖、直したほうがいいんじゃない？」

「お、おお。」

くそコイツ、追い討ちをかけるように。

「まあ、とやかく言ってねーで、行くか！」

俺たちはガシャットのボタンを押す。

『フォルティアクションＺ！』

『ホップステップリズム！』

『タガヤスアグリカル！』

「「変身！」」

一斉にレバーを開く。

『ガツチャーン！レベルアップ！』

『フォルティジョンプ！フォルティキック！フォルティファルティアクションＺ！』

『ホップ！ステップ！ジャンピング！ホップステップリ・ズ・ム！』

『タガヤス！ウエル！ソダツ！シュウカク！タ・ガ・ヤ・ス！アグリカル！』

おつし、変身完了！

前に似てるが油断はできねえな。

バグスター（？）は農さんにビームのようなものを放った！

「農さん、危ない！」

憐花は農さんを庇つて、倒れこんだ。

おいおい、まだ変身したばつかだぞ。

「農さん、退きましよう！」

「あ、ああ。」

憐花の変身を解除し、抱えながらCRへ戻った。

↓C R↓

「ハア、ハア。」

フウ、きつちーな。

取り合えず憐花を椅子に座らせた。

まだ起きねーか。

つて、何でだ？なんでコイツ。

私は、暗闇に立っていた。

目の前には。つ！

「お母、さん。」

暗闇の中、お母さんは私に言つた。  
「憐花。ワタシが死んだのは誰のせいでもない、誰を責める必要もないの。」

「お母さん、どういうこと？ねえ。」

遠ざかるお母さんを追いかける。

「待つて。待つてよー！」

そしてまた、目の前が暗くなつて。。。

バツと体を起こして目を覚ます。

「はあ、はあ。」

額に汗をかいて息を切らした私に。

「憐花ーっ！」

ポツピーが泣きそうな声で抱きついてきた。  
「ちよ、ちよっとポツピー？」

「憐花あ。」

ポツピーが涙ぐみながらコチラに向き直つた。

「もう、泣かないの。」

「だつてえ。」

そこに、善人が入つてきた。

「ん、起きたか憐花。」

「お陰さまでね。」

「ハツー・よく言うぜ。運ばれたくせに。」

善人は目を輝かせ求めていた。

「あ、ありがとう・善人。」

「ははは、素直でよろしい。」

善人はニッコリしながら生意氣に言った。

「それはそうと憐花、脱がねえのかソレ。まあ、似合つてんじやないか  
? w w」

善人は私の服を指差した。

「え?」

ナニコレ。自分で見てもよくわかんない。  
ソレを見てポツピーが全身鏡を持つてきた。

「え?」

えええーつ! ちょっと何これ!

ななな何で私、メイド服着てるの!?  
自分を見ると、段々赤面してきた。  
あまりの恥ずかしさにいやがみこんだ。

見上げると、善人がニヤアと笑っていた。

「ぜ、善人! わかつて運んできたの!?

「いや、気付いたのはココに来てから。」

「なんで、脱がしてくれないのよ!」

動搖のあまり、変なことを口走ってしまった。

「おいおい問題発言だねえ。男の俺がお前の裸を見ろと。」

「バ、バカア・。」

憐花はポツピーと着替えに入った。

はあ、人騒がせなヤツだな。

「善人ー!」

ポツピーが俺の名前を叫ぶ。

俺は渋々、憐花たちの場所へ向かつた。

「何だ。」

「この服ね、脱げないの。」

「それ、俺に言うか?」

憐花は少し涙目になつていた。

あーあ、メンドくせえ。

「わーたよ。俺がヤツをぶつ倒してきてやるよ。」

「えつ。」

憐花が驚いた表情で見つめる。

「待つてろよ。」

俺はそう言い、病院を後にした。

俺は街中を探し回った。

最後に居そうな場所へ行くと、

人がヤツに襲われていた。

「ちつ。」

ガシヤツトを構え一気に変身する。

「変身！」

『フォルティジヤンプ！ フォルティキック！ フォルティフオルティアクションズ！』

「おおらあああ！」

俺は相手にドロップキックをお見舞いした。

「早く逃げろ！」「は、はいっ！」

襲われていた人を逃がし、戦う準備はできた。

「行くぞ怪物。」

俺は走り出して、相手に殴りかかった。  
しかし、受け止められて押し倒された。

「ぐあつ！」

俺が少し立てないと。

「善人！」

憐花があの姿のままやつってきた。

「お前、待つてろって言つたろ！」

「私、人の指図つてあまり受けないのよ。」

「コイツ・。」

「そ、それに。仲間がピンチなら尚更でしょ。」

『ホップステップリズム！』

憐花はガシヤツトをベルトにセットしレバーを開く。

「変身！」

『ホップ！ステップ！ジャンピング！ホップステップブリ・ズ・ム！』  
更に、ガシャットをキメワザスロットにセットする。

『ガシャット！キメワザ！』

もう一度ボタンを押した。

『ホップステップ！クリティカルストライク！』

レカルカはバグスター（？）にキックして、ガシャットを奪い返した。

そこに、黒いプリスピーカー現れた。

「良い実験体ね。」

レカルカはドレスアップクローズをベルトにセットする。

「3ソーン！」

『ガツチャーン！レベルアップ！』

『アガツチャ！自由に着せ替えドレスアップ！カツコよく！かわいく！ドレスアップ！クローズ！』

レカルカの姿が変化し、服を着たようになつた。

「善人に出来たのよ。私にも出来るわ！」この力を使いこなす！

黒いプリスピーカーはクイクイと挑発してきた。

『ガシャコンムジーク！』

レカルカは武器を取りだし、ガシャットをセットする。

『ガシャット！キメワザ！』

「はああ！」

『ドレスアップ！クリティカルファイニッシュ！』

レカルカがムジークを弾くと、アクセサリーのようなものがヤツに飛んで行く！

ドオオオオン。という大きな音がなつた。

爆発の煙が晴れるとヤツの姿はなかつた。

↙C R ↘

「それにしても、疲れたなあ。」

「そうね。」

「憐花のメイド、可愛かつたなう。」

「ちよつとポップビー！」

憐花はまた赤面している。

「何だ、憐花はメイド服を着てたのか、見たかつた。」

「うわっ！院長！」

いつの間にか秋斗院長が居た。

「や、やめてよ、お父さん。」

「んだよ憐花。案外、満更でもないとか？」

「それは・。」

憐花は少し考えて。

「そうかも、しれないわね。」

「やつぱりか！ハツハツハ！」

俺が大声で笑つてると、

(似合つてるつて言われたし。)

憐花が何か呟いていた。

「何か言つたか？」

「いいえ、なんでもないわよ。」

そう言つた憐花は、クスッと笑つた。

お母さん、私。

この過去のこともつと知りたい。  
だから、これから探してみるよ。

s e e   y o u   n e x t   g a m a  
· · ·

次回！仮面ライダー・プリスピーザ！

「今度は、儂の番じやろ？」

「農さんつ！」

「ペツツグロー！」

次回！「心をG R O W、いざ進まん！」  
で、ゲームスタート！

## ステージ7 「心をG R O W、いざ進まん！」

前回のあらすじ。

憐花がドレスアップクローズの力によつて、メイドにされ。俺が弱味を握りましたよつて話だつたな。ちよつと！それだけじやないでしょ！

♪C R ♪

「順調に盗まれたガシャットを取り返してゐるな。」

今取り返したのは、ワンツースロットとドレスアップクローズか。バクドキホラーに関しては、黒男が持つてるしな。「みんな強くなつてゐるのゝ。ワシも前線に出て、戦えたらいいんじやが。」

「いやいや、ご年配に無理はさせられません。」

「足手まといと言いたいのか？」

「そんな！目上の方を敬つてゐるんですよ。」

下手な言い訳をしつつ、農さんの話を聞き流した。

といつても暇なので話し掛けた。

「憐花来ないつすね。」

「君のせいでは？」

「そんなあ、ただこの前のことイジるだけですよ。」

堂々とこんな発言をしたのだが。

「・・・。」

無視か。慣れちゃつたのかな。

すると、憐花と院長が入つてきた。

「またあのバグスターの情報が入つたわ。行きましょ。」

「おお！待つてました！」

そして、俺たち三人は目撃情報があつた場所に行つた。

向かうと、黒男とバグスターがいた。

「三人とも、行こうぜ！」

「気が早いけど、まあいいわ。」

「そうじやの。」

三人でガシャットを構えて、起動。

『フォルティアクションZ!』

『タガヤスアグリカル!』

『ホップステップリズム!』

「「変身!」」

一斉に変身し、それぞれの武器で相手に立ち向かった。  
農さんはバグスターを、俺と憐花は黒男を相手にした。

このバグスター、手強いのう。

いや、ホントに手強いか?

まさか、ワシが弱いんじや。

そう思うと、相手の攻撃を連続で受けてしまった。

「農さんっ!」

憐花くんが気にかけてくれる。

「ワ、ワシは大丈夫じゃ、だからソッチを頼む!」

明らかに大丈夫な状況ではなかつた。

そんな時、つい考え事をしてしまい、さらに攻撃を受けた。  
そのため、変身が解けてしまつた。

「ぐわつ!」

ああ、何でこんな事に。。  
すると善人くんが来て。

「退きますよ、農さん。」

「あ、ああ。スマナイ。」

ワシたちはバグスターらを背に帰つた。

♪C.R.♪

「すまん。ワシのせいです。」

「そのことはいいですよ。でも、どうしてんですか?」

「少し、考え方をしてしまつたんじやよ。」

「考え方……ですか。」

ワシは昔から一人で抱え込むことが多い。  
さらに、この前なんか。

善人くんが初めてあのバグスターと戦ったとき、ワシは見た。  
黒いプリスパーサの正体を。

言えるはずがない、今までワシたちと協力してきたのに。  
あの時はすぐに善人くんの後を追つたんじやが。  
途中で社長が変身するところを見てしまった。

だから、わざと遅れていった。

最低だ、そう思つた。

こんなことCRの人たちに言えない。

CRの人たち。

CRでない人なら？

宝さん。あの人になら、言つても。

「ちょっと、出かけてくる。」

「農さん、どこへ？」

「すぐ戻つてくるから、じゃあの。」

そしてワシは、宝さんのいる坪押しの店へ向かつた。

（劉寶軒2階）

「宝さん。」

店に入るなり宝さんに話し掛ける。

「ン？あなたは……。」

「あ、自己紹介がまだでしたか。ワシは農。大草農。」

ワシは簡単に自己紹介を済ませ、話を切り出す。

「宝さん。黒いプリスパーサについてですが。」

「……。」

宝さんの顔が険しくなつた。

「单刀直入の言います。ヤツの正体は、任藤天です。」

「!?」

驚いている、まあそういうやろうな。

「いつから分かつて？」

「実は先日、天社長が変身するのを偶然。  
宝さんには全て話すつもりだった。

例えその情報がC.Rに渡るうとも。

「ワタシもね、社長がゼロデイのプロトガシャツを管理してるので  
知つてネ。」

「確かに、黒いプリスパーサが使っているのは。」

「プロトフォルティアクションZ。」

「ワタシはそのことを、ズット疑問に思つてイタ。」

「成る程、それなら合点がつく。」

しかし、社長の目的は？

「目的は一体、何なんでしょうね。」

「それが分からナイ。なので様子を見ようかと。」

「分かりました。これからは少しお邪魔するのが多くなります。」

「ハイ、分かりました。」

そしてワシは、店を出た。

農さん遅いな。

さつきのこと気にしてるのか？

と思つたら、農さんが戻ってきた。

「農さん。てつきり帰つてこないのかと。」

「地味に酷いのう。」

「よし、みんなでバグスターを探しにいこうかの。」

「え？ あ、はい。」

急にどうしたんだ？

前線に出たいとか言つてたし。

まさか、それでか。

そんなら今回は農さんに譲るかな。

俺たちはバグスターの居そうなトコを廻つていたが、いなく。

近くのカフェで休んでいた。

「居ませんねえ。」

「そうじやのう。」

「急患を待つたほうが。」

「そうそう。無理に探さなくともいいじゃないですか。」

「コーヒーでも飲んで休むなんて洒落てる」と、

こんなときでもないと、出来ないし。

憐花はケーキを頼み、俺はコーヒーを啜っていた。

「あ、ウマい。」

店員が憐花のケーキを持つてくると、ゲームスコープが鳴った。

「「あつ・。」」

わーお、なんつーグッドタイミング。

「じゃあ憐花、俺たち行つてくるわ。」

「う、うん。」

「払つといてな！」

「えつ。ちょっと、善人！」※久しぶりのクズである。

そして俺は農さんとカフェを後にした。

### （風見公園）

おお。ここは懐かしの場所ではないか。

「ん、あれは。」

お馴染みの黒男とバグスターがいた。

「行きますか、農さん！」

「ああ！」

ガシャットを構え、一気にレベル2に変身する。

「変身！」

『ガツチャーン！ レベルアップ！』

『フォルティジヤンプ！ フォルティキック！ フォルティファルティア  
クション乙！』

『タガヤス！ ウエル！ ソダツ！ シュウカク！ タ・ガ・ヤ・ス！ アグリ  
カル！』

よつし、変身完了！

「農さん、バグスター頼みます。」

「分かつた。」

俺は黒男を相手した。

農さんは武器にガシャットをセットした。

『ガシャット！キメワザ！』

武器の鍬を構える。

『タガヤス！クリティカルファイニッシュ！』

鍬の刃をバグスターの肩に刺して無理矢理下ろした。

バグスターは爆発し、農さんはガシャットをゲットする。  
てか、この黒男全然やられねえな。

こうなりや、ワンツースロットを！

俺がガシャットを構えると。

「俺がガシャットを構えると。  
待つてくれ善人くん。」

え、何？

俺は黒男から一步下がり、間をとつた。

「どうしたんですか。」

「今度は、儂の番じやろ？」

まさか農さん、ガシャットを。

『ペツツグロー！』

やつぱりそうか！

農さんがガシャットを起動すると、画面から鹿みたいのが出でてきた。

てか、ええ。鹿？ダサイ。

そして農さんはベルトのレバーを閉じて、ガシャットをセットする。

『ガツチヨーン！ガシャット！』

「其の参！」

掛け声の後に、レバーを開く。

『ガツチヨーン！レベルアップ！』

すると、さつきの鹿が横から農さん目掛け突進して合体した！

『アガツチャヤ・ビツグなペツツに育てあげろ！レツツ！ペツツグロー！』

ネイチャードは肩に鹿の顔が付いた姿になつた。  
黒男は農さんに走つていった。

農さんは武器を構えて黒男の攻撃を防いだ。

そして鹿の顔が付いてる方で、ヤツにタツクルした。

黒男がやられたのを見て、キメワザをする。

『ガシヤツト！キメワザ！』

さらにもう一度！

『ペツツ！クリティカルストライク！』

農さんが武器をシャベルにすると、肩の鹿が離れた。

「昔は、草野球が得意だつたんじやよ！」

そう言つて、シャベルを振りかぶろうとした時！

グキツと大きな音。

農さんの腰にはG R E A T！の文字。

あつ。（察し）

鹿は微妙な表情で農さんを見たあと、黒男に突進していった。  
鹿の攻撃が黒男に当たると、ヤツはやられ、去つていった。

「み、農さん。やりましたね。」

「あ、ああ。そう・じやの・。」

そのあと俺は、農さんをC Rに連れて帰つた。

「任藤 桂馬 力。調べてみる価値はありそーだ。」

ワタシは爆走バイクのガシヤツトを見つめ、そう呟いた。

s e e   y o u   n e x t   g a m e

次回！仮面ライダープリスパー！

「天、社長！」

「サテサテ、どう料理しようか！」

「デリシャスクッキング！」

次回「運命の時！光るCOOKINGSENCE！」  
で、ゲームスタート！

## ステージ8 「運命の時！光るCOOKINGSENS E！」

前回のあらすじ。

農さんが鹿に突進されたよ！  
雑すぎじやろっ！

だつて他になんかありましたつけ？  
もう忘れましたよ…。（半ギレ

「任藤 桂馬サン、アナタに話があります。」  
ワタシは刑務所にいた。

目の前には任藤 天の実の父親【任藤 桂馬（じんどう けいま）】  
がいた。

今回は彼に話があつて来た。  
ゼロデイのこと、天社長のこと…。

♪C R 電脳救命センター♪

盗まれたガシャットは残り3つか、だいぶ順調だな。  
俺、憐花、そして農さんがレベルアップしていった。

残すガシャットは【デリシャスクッキング】【バクドキホラー】【ド  
ラゴペナトールZ】。

次は誰がレベルアップする？チラチラ やっぱいくら仲間でも対  
抗心に火が着いちやうよね。

でもなあ、最近全つ然バグスターも現れないし、楽しいこともない。  
C Rに拾われたから小児科の仕事もないし。てか給料は？出んの  
？

無償で働くかされてんの俺。ヤバくね？

「農さん、なんか面白いことないですかね？」  
「そんなこと言われてものう。」

あ～ダメだ。暇すぎる。遊びたいよ。

溶けるう、居なくなる。

ハツ!!

ゲームスコープから急患の知らせが鳴り響く！  
急患つても患者いないよな。

でもまあ、この音を聞きたかったんだよ俺は！

「んじゃ、行つてきまーす！」

「ま、待つてくれ。ワシも行くぞお。」

（風見公園）

着いたぞ。バグスターはと。

お、居た居た。

そこには前回まで戦っていた、頭にガシャットが刺さったバグスターがいた。

「おつし、いきますか！」

「おう！」

俺としつかり着いてきた農さんは変身し、バグスターに立ち向かう。

「うおおお！」『ガシャコンバスター！』

俺はガシャコンバスターを手に取り、バグスターを斬った。

攻撃を受けのけ反つたバグスターに畳み掛けるように農さんが相手を殴る。

そこに宝さんが駆けつけてきた。レベル1で。

「え、どうして。」

「ワタシも仮面ライダーだ、君たちばかりに迷惑はかけれないヨ。」

農さんは知つていたかのような反応をしている。

この二人なんかあるのか？まあいい。

宝さんはバグスターに向かつて行つたが、返り討ちにあつてしまふ。

おいおい、邪魔しに来たのかよ。

俺は宝さんをカバーするようにバグスターに斬りかかる。

が、レベル3の黒いプリスパークが割つて入ってきた。  
まざいな、ならこつちもレベル3だ！

丁度そこにいるバグスターのガシャットを頂くか。

「宝さん、レベルアップしてください！」

「ワカツタ！」

宝さんはベルトのレバーを開いてレベルアップする。

『ガツチャーン！ レベルアップ！』

『爆走！ 独走！ 激走！ 暴走！ 爆走バイク！』

宝さんがレベル2になると、俺は宝さんに乗つてエンジンを吹かす。

「お前ら覚悟しろ！」

俺はガシャコンバスターをバスターモードにして敵に向かつて発進する。

バグスターを斬り、Uターンして斬りを繰り返して弱らせる。

良い感じに弱つてきたな。キメワザだ！

ガシャコンバスターにフォルティガシャットをセットしてトリガーを押す。

『フォルティ！ クリティカルファイニッシュ！』

バグスターに向かつて発進して、バグスターの周りをドリフトで回転しながら斬りつける！

『会心の一発！』

バグスターはGreat!の文字と共に爆発しガシャットが飛んでいく。

運良く農さんがキヤツチしていた。

「取り返したぞ！」

「じゃあ、それをこつちに！」

農さんが投げてくれたガシャットをベルトに挿そとすると。

「そのガシャット、ワタシに使つてくれないか？」

俺の見せ場が、まあいいか。

「え、ああ。はい。」

ガシャットを起動する。

『デリシャスクッキング！』

ゲーム画面からフライパンとフライ返しの腕をしたキャラクターが出てきた。

降りてガシャットを宝さんのベルトにセットして、レバーを開く。

『ガツチャーン！ レベルアップ！』

『クック！ クック！ オーバークック！ デリシャスクッキング！』

宝さんは分裂したキャラクターと合体していく。するとキャラクターのパートは宝さんの腕となり足となり、人型になつた。

「フウ、やつと人型になりましたヨ。」

おお！ なかなかカッコい…え。

右腕にはフライパン、左腕にはフライ返し、頭には小さくコック帽。え、ダサ。

「サテサテ、どう料理しようか！」

宝さんは黒いプリスパーサに走つていき、フライパンとフライ返しで連続Hit！ させる。

「そろそろ正体を見させてもらいますヨ！」

キメワザスロットにデリシャスクッキングを挿してボタンを押す。

『ガシャット！ キメワザ！』

もう一度！

『デリシャス！ クリティカルストライク！』

黒いプリスパーサの足元から巨大な鍋が出現し、ヤツを覆う。

そして空中に現れた食材たちを、宝さんは切つたりそのまま入れたりし始めた。

「コレでメインディッシュだ！」

宝さんが叫ぶと、鍋の下から炎がゴオと吹き出し鍋ごと爆発した。

「サア、顔を拝見しようカ、ゲームコー・ボレー・ションCEO任藤天！」

「なに。天、社長……？」

確かに宝さんは任藤天の名前を口にした。

まさか、黒いプリスパーサの正体が?!

そして煙が晴れ、中から出てきたのは。

「誰だ？お前。」

「？」

中から出てきたのは天社長ではなく、黒い服を見に纏つた男だった。

宝さんも農さんも驚いているようで、男が喋り出す。

「楽しかったぜ善人。ホントにお前には驚かされるよ。だがしかし！」

し。」

男は指を振り、にこやかに言う。

「まだまだこの程度じゃないだろ。折角仮面ライダーの適合者になつたんだ。もつと楽しもうぜ。」

「誰なんだお前、適合者つてなんだ、なんで俺のこと知つてるんだ？」

「じゃ、また遊ぼうぜ。」

そう一言残し男は消えていつた……。

俺たちは変身を解除して、沈黙を貫いたのは俺だった。

「宝さん。なぜ黒いプリスパークの正体が天社長なんて嘘をついたんですか？」

「そ、それは…。」

「それにアンタ、農さんとなにかしてますよね。」

宝さんも農さんも黙つたままだつたが、俺たちはこの場を後にした。

「一体どういうことなんだ？」

（ゲームコーポレーション・社長室）

「ダガー、少しお喋りがすぎるぞ。」

「まあ、いいじゃないか。もつと面白くなるんだ。」

「計画に支障はない。順調に事は進んでる。」

「だが天。そのプロトガシヤット、それは底知れない力がある。それを使い続ける意味は分かつてているのか？」

「ふふ、そんなことは分かつてているよ。今日のところはいいだろう、私

は帰るよ。」

そして私は会社を出ていった。

誰も居ない社長社長に一人の男の姿が。

「これがプロトガシャツか、これを使えば俺は新たな力が手に入る。」

男は大笑いし、プロトガシャツを握りしめた。

s e e   y o u   n e x t   g a m e · · ·

次回！仮面ライダー・プリスピーザ！

「社長さん、やつてくれましたね。」

「だから無茶すんなって言つたんだ！」

「ドラゴペナトールΖ！」

次回！「D R A G O N を討ち取れ！」  
で、ゲームスタート！

## ステージ9 「D R A G O N を討ち取れ！」

前回のあらすじ

盗まれたデリシャスクッキングのガシャットを取り返し、宝さん改め仮面ライダーヴィアディがレベル3になつた。

そして黒いプリスピーサと対峙し、正体がゲーマコーポレーションCEOの【任藤 天】だと言つた宝さんだつたが。

しかし現れたのは謎の男、男は訳のわからない事を言つて消えた。一体なんだつたんだ・・・。

### ♪ C R 電脳救命センター♪

結局あの後なにも教えてくれないまま農さんたちと別れだし。分からぬことだらけだ、黒いプリスピーサのこと、宝さんと農さんが何やらやつてること。

そして、適合者つてなんだ?

そこに秋斗院長がやつてくる。

「随分早い出勤だね。良い心掛けだ。さき、早く掃除を。」

「なんすか、掃除つて。今じゃなきやダメですか。」

「衛生省がC Rに視察に来るんだつて。」

ポツピーがゲーム画面から顔を覗かせる。

衛生省? 視察? まためんどくさいことを。

ゞ苦勞なこつたな。

「C Rの創設者である大臣官房審議官がお見えになるんだぞ。」「はあ・・・」

確かに【薬袋 新太郎（みない しんたろう）】だつける。  
わざわざこつち来るなんざしないでもいいだろ。

まあ、適当にやりすごすか。

「くれぐれも粗相のないようにね！本当に！」  
「はいはい分かつてますよ。」

と、二人で掃除を始めたが、そこに電話がなる。  
院長が対応しているが。

「どうも電腦救命センターです。おお、これはこれは薬袋審議官！え・・・？バグスターに感染した⁈」

おいおい、まじか。視察のしかたが派手だな。

まあ、いつちよやつてやるか。お相手がお偉いさんなら金が弾むだろ。

そして患者を病室まで運んできては、診察をするのだが。

「善人・・・か。まさかこんな形での再開だなんてな。」

「ん。ああ、どうもご無沙汰です・・・」

え、会つたことあつたつけ？

あれ、でもこの顔どつかで・・・。あつ！

「いやあ！本当に、命を救つていただいた薬袋先生をお助けてできるなんて光栄ですよ！はは！」

うわ、やつべえ。マジで忘れてた。

何年前だつたか、生死の境を彷徨つていた俺を救つてくれた命の恩人だ。

なんで忘れてたんだろう。あぶねえ。

「診察しますね。」

「ああ。」

機械を動かして診察していると、薬袋先生が話し掛けてくる。

「ゲーム病、なんだろう？」

「はい、残念ながら。」

「さつき、バグスターを名乗る男が現れてな・・・。うつ！」

薬袋先生が苦しみ、身体が透明になつてている。

「善人・・・。オペを開始してくれ。」

「それだと先生の身体が危険ですよ。」

「いいんだ、これからもつと危険なことが起こるかもしれない・・・。なに？どういうことだ。」

そこに憐花が病室に入つてくる。

「話は聞きました薬袋先生。苦しいと思いますが、オペを開始しますね。」

「あなたは秋斗院長の娘さんの。」

「はい、琴音憐花と申します。必ず救つてみせます。安心してください。」

「んじゃあ、始めるか。」

「ええ。」

一人でベルトを装着し、ガシャットを起動する。

『フォルティアクションＺ！』

『ホップステップリズム！』

そしてベルトに挿し込み変身する。

「変身！」

『レツッゲーム！メッチャゲーム！ムッチャゲーム！ワツチャネーム！？アイム ア カメンライダー！』

変身すると先生の体からバグスターが現れた。

バグスターが実体化したあと、ステージを切り替える。

『ステージセレクト！』

溪流のステージに移動し、改めてバグスターを見る。

「こいつはドラコベナトルＺのキャラじやねえか。」

「盗まれたガシャットの一つね。」

「つーことは、先生を襲つたバグスターの男が犯人か。」

すると。

「二人だけか、物足りないだろうがまあいい。」

林の中から一人の男が現れた。

つてこいつ！この前橋の下で座つてた男じやねえか。

「この俺が自ら殺してやろう。」

そして男は黒いプリスパーサが使つていたタブレットを取り出した。

タブレットのAボタンを押して、握っていたグリップに装着する。

「培養。」

すると、男は緑色の怪人に変身した。

「・・・?!」

憐花はビックリしているようだが。

「俺の名は【カーボン】バグスターだ。」

「なんだと？まさか薬袋先生を感染させたのは・・・。」

「その通り、この俺だ。」

「ガシャットも盗んだんだろ！一体何がしたい！」

「何の話だ？まあいい。冥土の土産に教えてやる。俺はバグスターの存在をお前ら人類に周知させ、パンデミック起こしてやるのさ！」

なに！？

だから先生を狙つたのか。クソ。

「どうした憐花？」

さつきから黙つてる憐花に話しかける。

「あんたなのね・・・。あんたが！お母さんを！」

『ガシャコンムジーク！』

憐花は急に叫んだと思うと、カーボンに向かつて武器を振り下ろす。

攻撃は弾かれ、反撃されてしまう。

すぐに体勢を立て直し、追撃するも弾かれる。

すると憐花はドレスアップクローズを取り出す。

『ドレスアップクローズ！』

「3ソーン！」

憐花はガシャットを挿してレバーを開き、レベル3になる。

「お、おい！こつちはどうすんだ！」

憐花は聞く耳を持たずにカーボンに突進していく。

なんだつてんだよ、仕方ねえ俺がやるか。

『ガシャコンバスター！』

俺はバグスターにガシャコンバスターで斬りかかるも、尻尾で跳ね返される。

「ぐつ！まだまだ！」

空中で受け身をとつて浮いていたブロックを使ってバグスターにもう一度斬りかかる。

Hitするとバグスターは弱る。

「よし！キメワザで！」

「もう、まだ成長しきっていないか。」  
ガシャットを武器に挿そそうとすると。

「怒号・龍激撃！」

カーボンが俺に向かつて持つてている武器で斬撃を飛ばしてきた。  
憐花も巻き込まれ、二人とも飛ばされる。

倒れこむがすぐに起き上がる。

がしかし、バグスターとカーボンの姿はなかつた。  
仕方なく俺たちは病院に戻つた。

「どういうつもりだ憐花。」

「・・・。」

「俺はいいんだが、お前は先生に救つてみせるだかなんとか言つてた  
よな。」

「そ、そんなの分かつてゐわよ！」

「カーボンとかいうやつが何だか知らんが自分の言葉には責任持てよ  
な。」

「善人に何が分かるのよ！」

「ちよつと憐花！落着いて。」

憐花は怒鳴るが、アリスに止められる。

アリスは何か言いたげな表情をしているような・・・。

「こいつになんか言いたいんじゃないか？」

「それはそなうなんだけど、追い打ちを掛けるようになつちやうけど。」

「ごめんねポツピー、いいよ。」

「その、二人が戦つたカーボンつていうバグスターなんだけどね。実  
は宝さんがゼロデイの日に倒せなかつたバグスターなの。」

「!」

ポツピーが言うには、ゼロデイの日にカーボンに感染した憐花の母  
親は、宝さんがカーボンを倒せなくて消滅してしまつたらしい。

それを聞いた憐花は、目に涙を浮かべながら部屋から出ていつた。

ダメ元で電話してみたが、果たして来るだろうか。

「どうしたんですか宝・劉生さん。」

「お、来ましたネ。しらばつくれなくともいいんですヨ。」

「まさか、正体がバレてしまつたなんてね。」

「本当に。社長さん、やつてくれましたね。一体あの影武者は?」

「あなたに言うわけないじやないですか。」

ワタシたちは同時にベルトを装着しガシャツトを起動する。

『爆走バイク!』『デリシャスクツキング!』

『フォルティアクションZ!』『バクドキホラー!』

『ギア3。』『ギガバイト。』

「「変身!」」

そして互いに拳を交える!

「憐花、帰つてこないね・・・。」

「仕方ねえだろ。」

「やっぱ悪いことしちゃつたな。」

「そうだな。」

まあ、先生になにかあれば帰つてくんだろ。  
もう一度先生の様子見てくつか。

「どうですか先生、調子の方は。」

「この通り、まだ大丈夫だ・・・。」

「それなら良かつたです。」

「憐花くんと何かあつたのかい?」

「ははは、聞こえてました?少しいざこざが・・・。」

愛想笑いをするも見透かされてるよう先生が言う。

「善人。医療というのはチームでするものだ。一人ではできないこと  
が多々ある。」

「は、はい。」

「私も、私一人の力で君を救つた訳じやない。」

「俺はある程度理解しているつもりなんですけどね。」

「流石だな。それじゃ、憐花くんに伝えてくれるかな。」

「めんどくさ。※久々のクズである。」

「君たちには大いに期待しているんだ。世界の運命は君たちに懸かっている。」

「世界ですか。そういうえば確かバグスターの男が・・・。  
薬袋先生にカーボンの企みを伝えると。

「な、なんだと・・・！それは、まずい。」

そりやそうか、パンデミックなんて起きたら今までの苦労が水の泡だ。

まさにそれこそ、が先生のストレスの原因かもしれない。  
だとしたら、次にヤツが動くとしたら！

「うつー・うぐ！」

バグスターが動き始めたか。

俺一人で何とかするしか。

たまたまベッドのモニターに目が行く。これは・・・。  
そして俺は病室を後にする。

ビルの屋上、カーボンが一人で佇んでいた。

「やつと見つけたぞ！カーボン！」

「来たか。お仲間はどうした。」

「お前なんか俺一人十分だ。」

「いや、あんたにはやらせない。」

そこに憐花がやつてくる。

「お、お前！」

「カーボンは私が切除する！」

「おい！あんま無茶すんなよ！」

そして俺たちは一気にレベル3に変身する。

「変身！」 「培養。」

『ステージセレクト！』

さらにステージを変えて開けた場所に移す。

ドラゴンのバグスターも現れ、混戦が予想できる。

そこにレベル1の農さんが来た。

「バグスターはわしにまかせろ！」

「ま、まかせましたよ。」

今はこの前のことを気にしてる暇はないな。

憐花は突っ走るようにカーボンに攻撃していく、俺はそのフォローをする。

農さんは決着を着けるように、武器でとどめの一撃を喰らわす。すると、ドラコベナトールZがクリアされ、農さんがガシャットを手に入れた。

憐花はカーボンから距離をとり、農さんからガシャットを奪う。

「渡して！」

「憐花くん！」

「確かドラコベナトールZはレベル5のガシャットだつたはず！」

「ばか！ なにやつて！」

『ドラコベナトールZ！』

憐花がガシャットを起動すると、画面からドラゴンのゲームが出てきた。

『ガツチヨーン！ ガシャット！』

「私がカーボンを倒す！ 5ソーン！」

レバーを開く。

『ホップ！ ステップ！ ジャンピング！ ホップステップリズム！』

『アガツチャード・ド・ドラゴン！ ドラコベナトールZ！』

ドラゴンゲーマは分離してレカルカの胸や手足のアーマーになつた。

がしかし、突如レカルカに電流が走り苦しみ出す。

「うわあああっ！」

暴れながらカーボンへ突進していくが、攻撃を避けられ反撃で飛ばされてしまった。

転がった拍子にガシャットがベルトから外れて、変身が解除された。

「なんだ、レベル5もそんなものか。」

カーボンは倒れた憐花に近付き、武器を振り上げる。

カーボンの攻撃が当たる前になんとか憐花を抱え、救出した。

「ぜ、善人……。」

「ばかやううー！だから無茶すんなって言つたんだ！」

俺がやる。

憐花を助けたと同時に取つたドラコベナトールΖを起動する。  
『ドラゴペナトールΖ！』

「最強ゲーマーΖの真骨頂、見せてやる！」

ガシャットをベルトに挿し込み、レバーを閉じる。

「大、大、大、大、大変身！」

掛け声とともにレバーを開く。

『フォルティジヤンプ！ フォルティキック！ フォルティフルティアクションΖ！』

『アガツチャ！ ド・ド・ドラコ！ ド・ド・ドラゴン！ ドラコベナトールΖ！』

ドラゴンゲーマと合体した途端に、俺に電流が走る。

「うぐああ！」

身体が勝手に暴れだすのを必死に抑える。

「お前はあー！俺が倒すつ！」

ガシャットをキメワザスロットに挿し込み、ボタンを押す。

『ガシャット！ キメワザ！』

「うおおおおおつ！！」

そしてもう一度！

『ドラコベナトール！ クリティカルストライク！』

カーボンに向かつて波動を飛ばす。

波動で怯んだカーボンに左手を構え、ビームを発射する。

「ぐわああああ！！！」

『会心の一撃！』

カーボンは爆発し、俺はビームを飛ばした反動で変身解除してしまつた。

「だ、大丈夫か！」

農さんが駆け寄つてくる。

爆発の煙が晴れると、人間のカーボンが片膝をついて弱っていた。  
あれで倒しきれなかつただと！

「俺が人間にここまでやられるとは……だが。」

「!?

カーボンは黒いドラコベナトールΖのガシヤットを取り出した。  
「俺はこの力で更なる強さを手に入れる！」

『ドラゴペナトールΖ！』

カーボンはガシヤットを左胸に勢いよく挿す。

ガシヤットを挿した位置から強大なエネルギーが溢れでる。  
エネルギーの光が眩しくて顔をそむける。

「ふはは！ふははははは！」

顔を戻すと、そこには、黒く染まつたカーボンの姿があつた。

S e e   y o u   n e x t   g a m e :

次回！仮面ライダープリスパーク！

「協力なんてできませんよ。」

「アイツに勝つにはこれしかない！」

「最終決戦だ！カーボン！」

次回「医者たちの協力PLAY！」  
で、ゲームスタート！